

村野東一君・召天

2024年7月7日

2023年6月27日、第59回D組クラス会の帰路、「自分は元気なつもりなのだが、胆嚢の数値が良くないので検査入院する」ことを聞きました。その後2回メールでやり取りをしました。12月28日突然メールが入りました。「11月14日手術をしたが十分に取れなかったので、12月5日第2回目の入院をして治療を受けている。生まれて初めての入院で戸惑っているがこの闘病の意味を考えている。」

4月1日D組クラス会幹事に「6月1日、出席します。」とのメールが入っています。快方に向かっていると安心していました。次に電話を受けたのが2024年6月25日でした。村野東一さんの「思い出の一コマ」を記載します。これは当日の原稿です。

1、ここに立っている理由

村野君と私は大学1年生の時から4年生まで同じクラス、また同じゼミナールで2年間、そしてクラブ活動は学生YMCAで共に学びをして参りました。私が2年の後半から色んなことが起こり学業の継続が困難になりました。その折に暖かい手を差し伸べてくれたのが村野君でした。ご自宅に何度もお伺いして、ご両親、お兄さん、妹さんにもお世話になりました。卒業後も必要な時々に来て語り合い議論もしました。そんな関係で私は今ここに立っております。

2、D組クラス会のこと

今年の6月1日、昭和39年卒業の私たちは60周年を記念するクラス会を日吉の校舎で開催しました。このクラス会は卒業後毎年実施され、一年も欠かさずに行われてきましたので、ギネスブックに乗るのではないかと思います。

村野君の欠席を予想した人は誰もいませんでした。

なぜならこのクラス会継続を支えてきた一人、立役者が村野君だったからです。

4月頃には「元気になって出席するから心配しないでくれ」というメールも届いていました。本日後列席の友人とも親しくメールをしていました。

本日今年の幹事を務められた平田君が中田先生の奥様からのメッセージを持って遠路きてくれました。Dクラス担任の中田先生は早くにお亡くなりになっておられますので、クラス会では奥様をご招待するのが慣例になっていました。その奥様からのメッセージです。

「お元気な姿以外の村野さんは想像できません。もう一度お会いしたかったです。」

3、6回の検査入院（この部分はカットされました。クラスのメンバーから質問の多いところでした。再掲しました。）

奥様のお話では昨年8月から6回検査入院をしていたこと、6回目の検査入院も歩いて一人で病院に行ったとのこと、当然元気で戻ってくると誰もが疑わなかったのですが最後はストレッチャーに乗せられて6月25日に退院したということです。ご家族のショックは大きく結果は受け入れ難いものでありました。

4、退院後のこと

6回目の退院後すぐに電話がありました。6月27日にお伺いしました。

いつも元気な村野君の姿を見て私は絶句しました。しかし、東一さんは悠然として淡々と話し出しました。

いくつかの質問にも明確に答えた姿は毅然としていました。

話の成り行きと親しさから、「ところで葬儀はどうするんだ」とごく自然に、ほとんど無意識に、聞いてしまいました。

村野君は全く動ずることなく、讃美歌を取り出してページをめくり多すぎる愛称讃美歌から3曲を決めていきました。私は死から解放された村野君の一挙手一投足に驚きました。この力はどこからくるのだろうか？

29日は聖書の箇所を聞きました。すると間髪を入れずヨハネによる福音書3章16節、17節との答えました。その箇所をお嬢さんに開けてもらいましたらそこに葉が挟まれていました。この力はどこからくるのだろうか？私は再び聞きました。

7月1日にお伺いしたときは私に「思い出の言葉」を述べて欲しいという雰囲気になりましたので、「わかった。この3冊の話をするよ。大論文のこと話すよ」と言いましたら、満面の笑みを浮かべて喜び、手を取り合いました。これが私にとっては最後の会話でした。この力はどこからくるのだろうか？私は三度聞きました。

5、3冊の本について（この部分は改訂前の文章です。私の記録としては残したいところです。）

ここに3冊の本があります。村野君の導きで私は中村勝己先生のゼミナールに入れて頂きました。指導の厳しさではトップクラスです。メンバーは一学年平均7名という少数精鋭の集団でした。中村勝己先生の指導は卒業後も続き厳しさの中で培われた先生の優しさに感動するものが多く先生の退職記念に論文を献呈、お別れの時にも思い出を献呈するほどに親しまれた先生です。それで出来上がったのがこの本です。総ページ数638、村野君は最長で94頁に及ぶ大論文です。一人平均43頁ですから村野君は2倍の資料提供をされたのです。題名は「メキシコ近代化における変革の構造」です。この本は国会図書館はじめ、主要大学の図書館に寄贈しました。都市部の図書館にも寄贈しました。

5、3冊の本

ここに3冊の本があります。いずれも私たちが属していた中村勝己先生に関する本です。詳しくは皆様のお手元にお届けしてあります。特に遺稿2「オフィスと道標」は総数638頁の大著です。中村先生は引退後10年の時を見てゼミ卒業生165名に向けて「恵まれた君たちは後世に残すべきものを持っている。それを文章にしておくことを勧める」と発信されました。私たちにとっては卒業後34年です。現役で最も重要なポストにある時期でした。みんなが躊躇しました。村野君はこの難問の世話役をかってでたのです。与えられた期間は6ヶ月、13名が寄稿しました。多くの難関を超えて出来上がったのがこの本です。

村野君の論文は、94ページにおよび13名中、最も長文で資料も豊かな内容で、学者グループを凌いだ大論文です。この本は国会図書館一主要大学の図書館及び都市部の図書館に寄贈しました。

6、このように村野君は「義をみてせざるは勇なきなり」を実践した人です。誰もがやりたくないことを率先して手を挙げて私たちを導いてくれました。

正義に対しては妥協しない反骨精神を持って生き通したと私は思います。あまりの激しい正義感のゆえに衝突もありましたが、最後はいつもニコニコして和解をしていました。

7、最後に村野君の愛称聖句をお伝えさせてください。それはヨハネによる福音書14章①から③節です。「心を騒がせるな。神を信じなさい、そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住むところがたくさんある。行って、あなたがたのために場所を用意したら、戻ってきて、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうしてわたしのいるところにあなたがたもいることになる。」村野君は「心騒がせず、神を信じて、」イエス・キリストと共にある永遠の命の世界に今おられると私は信じております。

村野君と共同研究したヨハネの黙示録の21章③～④a 当日はカットしました。

「その時わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない』この部分はキリスト者でない人がヨハネの黙示録を曲解して出版している物が多い。そんな話を彼としたことを知らせなかったのです。

村野君のあの力の根源はここにあったのではないだろうかとは考えました。

ご清聴有難うございます。2024年7月10日

村野東一さんとの約束で3冊の本を紹介しました。

2冊については原文通り読み易く横文章として別紙の通り130名の方に配布いたしました。

村野東一君遺稿について

慶應義塾大学経済学部中村勝己ゼミナールで学んだ者には卒業後に三度、時々思いを執筆する機会が与えられました。村野兄は下記の通りその全てに貴重な投稿をしており又世話役を引き受けていました。

下記1と3は全文を掲載します。生前に本人の承諾を得ております。 小原靖夫

遺稿1 「中村克己先生御引退記念論文集」 (1989年12月刊)
『中村勝己先生との出会い』 ・ (村野君47歳)

遺稿2 「オフィスと道標」 (1998年4月刊)
『メキシコ近代化における変革の構造』 (村野君56歳)

遺稿3 「学問・教育・信仰」中村勝己先生が遺されたもの (2015年3月刊)
『キリスト教との私の出会い』 (村野君73歳)

遺稿1

「中村克己先生御引退記念論文集」（1989年12月・村野君47歳）

この年は村野東一兄大学卒業25年、47歳の時の投稿です。

中村勝己先生との出会い

私が会社に入り、コンピューターの部門に配属され、どの分野を担当したいかを問われたとき、即座に生産管理を要望したのは、中村ゼミからの影響からでした。

「産業資本と商業資本」の構図を意識し、製造業を選び、またコンピューターの分野であれば車造りそのものに近い分野で働きたいと言ったのを思い出します。それから25年間はほぼ同一の分野で働くことになりました。

最初の10年間は国内の生産管理システムを、次の約10年間は海外の生産管理システムを、現在は国内・海外両方の生産管理システムを担当しております。

この間、その時々で会社の動きと共に環境も変化しそれぞれの時代に於けるキーワードも最初は輸入自由化のための国際競争力の強化であり、次は完成車輸出規制・貿易摩擦回避のための海外工場進出であり、現在は再度国内対応としての個性化・付加価値化による差別化とグローバゼーションといえます。

その都度の環境変化の中で考えるときのベースとなり、意識するものは中村ゼミでの教えであったことを改めて思い返しております。

最初は日本企業の近代化への課題であり、次は日本的経営・生産方式と現地化・受け皿(共鳴盤)の問題であり、現在は個の確立・創造性と日本の特殊性を越えての国際化への対応の仕方となります。

海外との関わりを通じ、中国・先進国ともそれぞれ環境条件により課題は異なります。

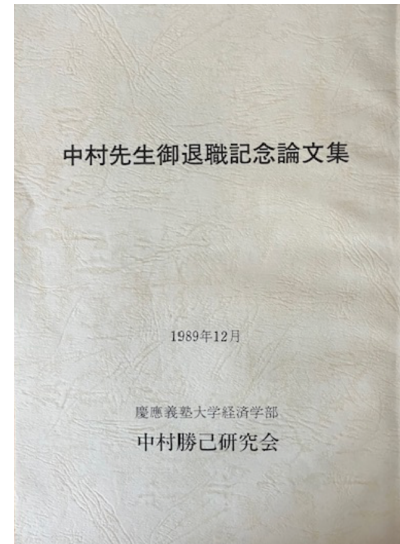
中国での場合は現地人の共鳴盤としてのエートスの観点からの社会構造や土地所有関係が問題となっていると思われます。今回はこのことについて考えたいと思います。

具体的例としてメキシコでは個々人の作業の確かさや速さは日本人と異なることはありません。しかし自分の仕事を日々の日常業務の中で工夫をしつづけ組織的に改善していき、将来的には自らの手でこの会社を動かしていくぞという姿勢は見られません。このような自らの努力で工夫・改善をするという訓練が家庭生活・社会生活の中で余りなされていないようです。勿論、上階級の子弟は私立学校で教育され、欧米大学での留学等高い教育を受けておりますが、それはごく一部の人々だけといえます。

かつて、スペイン人の征服により支配・被支配の関係が確立し大多数のメスチーソと呼ばれる人々は農奴として扱われ主体者としての地位を与えられませんでした。

現在でも比較的やり手で色の白い人が上司であり部下が人の良い褐色の人の場合は微妙であり公私に亘って日本の荘園領主と農奴の様な支配者・被支配者の関係を思わせるようなところがありました。勿論これは一事例の体験であり全てを論じることは出来ません。

このような中でメキシコの大学の経済学部では日本でのソニー工場の成功例が近代的経営学で講じられ一般的世界と大学での隔絶を感じました。



メキシコ市やモンテレーという近代的な大都市や欧米から進出してきたトップ企業、そして大学で講じられる世界と地方都市や一般のメキシコの地場企業や農村地帯との世界では別の世界といえます。

農業ではメキシコ市周辺の良く管理され灌漑施設の整った輸出を目的とした大経営と毎年繰り返される雨季により表土が流され痩せた山岳地帯農業から成り立っています。

経済・農業政策の問題からこれら山岳地帯の農業がうまくいかず、原産品の主食トウモロコシは従来輸出商品であったものが今やアメリカからの輸入に頼らざるを得なくなり、生活できなくなった農民がメキシコ市へ流入し社会問題となっています。

このような近代的な産業・企業が自生的でない社会での近代化を進めて行くには一私企業の範囲を越えた問題が横たわっています。

今やメキシコの子会社は従来の問題点を改善しつつ、メキシコの自動車業界ではトップシェアーの企業となり、マイナー企業であることからくる問題点は消しつつありますが、今後の課題はアメリカ・日本等への輸出ということから国際競争力ある商品の生産をいかに達成するかという新たな問題が生じております。

中・後進国におけるそれぞれの国の社会の二重構造と近代化への道の模索とは、別の世界で多国籍企業の論理から来る新たな生産諸関係を構築していくことの問題点が不明確なまま企業課題の達成に埋没しているというのが偽らぬ実感であります。

この意味で一私企業の枠を越えた単に企業進出と言う視点だけではなく、その国の近代化・社会発展の問題点の理解、どの様な切り口で近代化を進めていくかとの視点を持つことが重要となっております。それぞれの国はそれぞれの社会環境条件の違いにより近代化の道は複雑であり一筋縄ではいかないとは思います。

ODA援助の拡大が世界的に要請され、それを実現しようと日本自身が意思している時、アメリカ・イギリスではなく日本の道のみが良いという短絡的な発想では双方の国にとって益にはならないでしょう。その国に合った道のかつての日本が思考錯誤を繰り返しながら、多くの矛盾を持ち進んできた先進国にはない経験を生かして共に苦勞し、考えていく姿勢が必要とされています。

この点中村ゼミに期待するところは大きく「近代化の方法論・その国の特殊条件の洗い出し、結果として発生する問題点の事前説明」が出来る点で大いに貢献できるのではないかと楽しみにしております。

中村先生との出会いはゼミでの2年間でしかありませんでしたが、それからの私の行く先々で何時も私の側におられ、曇った目を少しでも見えるようにと励ましていただいているのを感じております。

中村先生有難うございました。今後ともご健康に留意され、先生のテーマを実現されることをお祈り申し上げます。

遺稿 2

「オフィスと道標」中村勝己研究会出版刊行会（1998年4月・村野君56歳）
『メキシコ近代化における変革の構造』

この本は中村勝己先生が退職されて9年後、先生から卒業生全員1期生から28期生までの165名に呼びかけられて13名が参加した638頁に及ぶ大著である。中でも村野君の論文は94頁（一人平均43頁であるが遥かにそれを超えている。）に及びこの書の最長にして学者グループを凌駕している。テーマは「メキシコ近代化における変革の構造」1974年メキシコの工場に到着した時からの詩的な文章で始まっている。内容は地図、統計表、グラフが数多く挿入されており7章からなる大論文である。結語の第7章の題名は「第3の変革へのメキシコの挑戦に対する日本からのメッセージ」でメキシコへのオマージュとなっている。本著は国会図書館、主要都市の図書館及び主要大学の図書館に謹呈されている。メキシコの人々には勇気を与え、学徒には貴重な第一次資料となる。（小原靖夫記）



遺稿3

「学問・教育・信仰」中村勝己先生が遺されたもの（2015年3月村野君73歳）
「キリスト教との私の出会い」

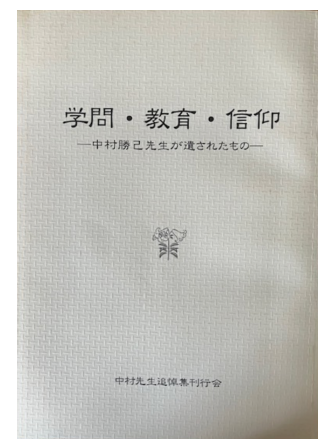
「狭き門より入れ」中村先生からの言葉です。

私は中学三年の時に、力づくでなく、まなざしだけで弱者を救うイエスに支えられたいと日本基督教団に入り、今も同じ教会に所属している。中村先生は「現世の人間の悩み、苦しみ、問題としていることを、クリスチャンがいつそう深い意味で、いつそう高い次元で、いつそう広い視野でとらえ、より根源的な回答を与えることができないならば、彼らは、この世にあって十分機能を果たしているとはいえないのです」と。先生のいうこの緊張関係に耐えぬ弱き存在と自覚している。

遠藤周作の「沈黙(1966年)」は「どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」と。卒業し聖書の世界との違和感を覚えていた時で衝撃的であった。

W・イエーガーの「初期キリスト教とパイディア (1961年)」と出会い、「ギリシャ哲学者とパウロが論争する共通の基盤としてギリシャの哲学的伝統を選び、キリスト教思想のヘレニズム化はこの瞬間に起こった」と、ユダヤ教からのイエスの教えが、ギリシャ・ラテン思想との接触で其々変質した西洋的キリスト教の特徴は、ある地域で解釈された教で、日本的思惟がキリスト教世界に果たせる可能性を知った。

新渡戸稲造は、「武士道(1899年)」で「我が国におけるキリスト教伝道事業失敗の一原因は、宣教師の大半が我が国の歴史について無知なること。アメリカ・イギリス的形式のキリスト教(キリストの恩寵と純粋よりもアングロ・サクソンの意妄想を含むキリスト教)は、武士道の幹に接木するには貧弱なる芽である。



功利主義者及び唯物主義者の損得哲学は魂の半分しかない屁理屈屋の好むところ。だが、それに拮抗出来る倫理体系はキリスト教あるのみである」と。新渡戸が武士道に接木できるのはキリスト教と云いながら、アングロ・サクソンの意妄想を含むキリスト教ではないと云う時、マックスウェーバーの「精神のない専門人、心情のない享楽人(1920年)」の言葉は、新渡戸とは異なる視点からアメリカ社会を分析し、アメリカ社会の問題点を予告し共有している。

新渡戸は、1887年25歳で、ボルティモア友会(クェーカー派)会として認められ、1891年クェーカー派のメリー・エルキントと結婚をし、国際連盟事務次長を辞する1926年12月にジュネヴ大学で“日本人クェーカー”を講演している。クェーカー派は、清教徒革命の最中1648年、英国人のジョージ・フォックスにより創設され、「クェーカー教義の出発点は、“内なる光”その“光”は、この世に生まれくる全ての者を照らす光だが、その存在を信じることである。人間ではな一つの“神格”の内在である。

私が少年の頃、キリスト教の説教を聞きキリスト教関係の本を読み始めた時、正直いって納得できず、クェーカー主義において初めて、キリスト教と東洋思想とを調和させることができた。東洋哲学は、“全体、の生命と個人の生命との同一性を思索することを好む。また、自分の“神霊”は、“宇宙の神霊、と深い霊的交渉をもち、どこの場所で体験しても同一の体験である」と。この信仰体験を受け、「武士道」に記された個人主義たるアングロ・サクソンの恣意妄想を含む西洋キリスト教への問題提起をする背景があったといえる。

今、混乱する世界にあって、聖霊の働きで日本的思惟によるキリスト教理解の世界を開くことが求められる。これは日本古代の精霊信仰・先祖崇拝にも優る中身であり、日本土着化による“業”に対し緊張関係を保ち、イエスのまなざしに支えられ、日本人に語り伝えたい。

慶應義塾大学経済学部昭和39年卒D組

長谷川大二君からD組諸君へのメッセージです。有難うございます。

昨日、村野君の葬儀に参列してきました。曇り空で、助かりました。教会でしめやかに行われ、祈祷と讃美歌、祈りで村野君の魂を天に送る式が、教会のみなさんの手で厳かに進められました。個人の略歴も述べられ、また「思い出の言葉」を小原君が語りました。中で、D組クラス会はギネス級に開催されていると話されましたし、彼と彼はクラスとゼミが一緒に、家族ぐるみのお付き合いと話されました。参列者に諸君がいました。小原君に聞いたところ、平田君が顔を見せてすぐ帰ったとか。岩上君の供花も届いておりました。元気印の村野君のお陰で、D組の名簿がバージョンアップされ、クラスの結束が図られていたことを思い、感謝の念を捧げました。村野君の遺稿3冊も紹介されましたが「オフィスと道程」は1998年4月刊行だったそうで、確かクラス会に持ってきていただき、私も手元にあります。出棺前、村野君の顔を見ながら花を置き、堀之内の葬祭場に向かう車列を見送りました。すがすがしさの残る、良い葬儀でありました。長谷川 大二 2024年7月11日

私（小原）はクラス会に出席するようになったのは10年位前からですが、長谷川君がよく覚えておられ最初の出席は2013年1月10日、その年までは年2回の開催で6月18日にも出席しています。いずれも村野君の誘いでした。そして同じ月6月27日長谷川君、村野君と私と他数名で藤沢のルミネで開催されていた藤井幸造君の陶芸展を鑑賞しに行きました。私の記憶から欠落しているところを長谷川君が補ってくれました。有難うございます。

パリ通信・第151号

カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」

パリ・オリンピック開催を目前に控え、フランスでは七夕総選挙が行われた。ヨーロッパ連合議会での極右台頭を受けてマクロン大統領は下院解散総選挙に踏み切った。577議席を争う2回の国民投票(6/30と7/7)はともに67%を超える高い投票率だった。第一回投票で半数近くの議席を獲得した極右に過半数を取らせないのが7/7決戦投票の鍵となった。幸い極右の過半数という最悪のシナリオは免れたものの、与党、左派連合、右派連合の三つ巴となり、オリンピックと夏のバカンス中の政治混乱を避けるため、マクロン大統領は首相任命を先延ばしにしている。誰が首相になっても混沌とした政治不安は続きそうである。

7/26オリンピック開催式テロ対策も本格化している。セーヌ川を選手団が船で入場行進するという類稀なオープニングの安全を確保するため、川岸には高さ2mのバリケードが張り巡らされている。毎年日本の学生さん達のパリ語学研修サポートを行なっているが、今年は交通規制や入場規制で7/13を以って研修を終了した。

仕事がひと段落したので、オリンピック熱で沸騰するパリの喧騒を逃れてイタリアに来ている。シシリア島東海岸のシラクーサと

メッシーナを見る2週間の旅。パリから飛行機で2時間40分でカターニア国際空港に到着。標高3357mのエトナ山を遠くに見ながら空港から高速バスに乗って1時間。チュニジアに近いことを思わせる乾いた広大な大地、熱い太陽と抜ける青空、ブーガンビリエの花が美しいシラクーサに到着した。これまで見てきたイタリアの風景とは全く異なり別の国のようで昼間はジリジリと焼ける日差しで15時過ぎまではどこも閉まっている。



シラクーサで見たかったのがカラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」である。カラヴァッジョ(1571-1610)(本名ミケランジェロ・メリージ)が1608年シラクーサで描いた大きな祭壇画(408 x 300 cm)だ。暴力沙汰や訴訟が絶えなかったカラヴァッジョの生涯で、1606年5月ローマで喧嘩から殺人を犯したことは致命的だった。マルタ島へ逃れマルタの騎士団に身を寄せる。しかしまたしても暴力沙汰を起こし投獄されるも脱獄、1608年10月シシリア島シラクーサに船で辿り着く。1609年にはメッシーナに移動しており、ごく短いシラクーサ滞在中に描いたのがシラクーサの守護神「聖ルチアの



埋葬」である。



フランシスコ・デ・スルバンス
「聖ルチア」(シャルトル美術館蔵)

シラクーサの裕福な家庭に生まれたルチアは4世紀初頭に咽喉を切られて殉死する。名前(ルーチェは光の意)から「目」の守り神としても知られ、宗教画では棕櫚の枝を持ち両目を皿に乗せて描かれることが多い。

カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」は画面の上半分には何も無い。地面に横たわるルチアの咽喉は切られて傷口が開いている。大きく遅しい二人の男がルチアの墓を掘っている。ルチアの死を嘆き悲しむ人がある。赤い衣の若い司祭が手を合わせている。劇的なルチアの死は同時にルチアの死の勝利を暗示している。横たわるルチアは左手に永遠の死を象徴する

「棕櫚の枝」を持っている。二人の墓掘り人の四肢が形作るアーモンド形「マンドルラ」はルチアの永遠の死を祝福し、天に上る魂の勝利を祝福しているかのようなようである。

赤い衣は
キリスト

の血を象徴すると同時に愛を象徴する色でもある。

殺人犯として追われるカラヴァッジョがルチアの死に自らを重ねたとしてもおかしくない。レアリスム、光と影の画家として名声を成した芸術家としてではなく、1610年、38歳で悪人としてこの世を去る一人の人間としての存在を残したいと願った作品ではないだろうか。シラクーサからメッシーナ、パレルモを経てナポリへ渡り、法王の恩赦を求めてローマに向かうが小さな港町ポルト・エルコルで病死するまでの2年間に描いた最後の作品には画家として頂点に達したローマ時代にはない無の空間がある



カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」

聖人の死は人の死と重なる「聖ルチアの埋葬」は「一粒の麦が地に落ちて死ななければ一粒のままである。死ねば豊かな実を結ぶ。自分の命を愛する者はそれを失い、自分の命を憎む者は永遠の死に至る」の一編を思い起こさせる。(古賀順子記)